

# 湯浅初の「学力履歴」

— 熊本県立洋学校、慶應義塾幼年局、同志社英学校 —

山下 智子

## I. はじめに

本研究は湯浅初（1860〔安政7〕年 2月14日〔陰暦1月23日〕-1935〔昭和10〕年3月13日）が受けた教育に注目し、初が学んだ各校での在学期間や、男女共学体験について検討していくものである<sup>1)</sup>。具体的には、東京府に提出された「榎坂幼稚園設置願」（1887年5月11日付）に記された「保姆等品行学力履歴及幼稚園設立者履歴」中の初の「学力履歴」部分（以下、「学力履歴」）を手掛かりに、キリスト教の影響がみられる熊本県立洋学校（以下、熊本洋学校）、同志社英学校での学びを中心に、慶應義塾幼年局（幼稚舎）での学びについても触れる<sup>2)</sup>。

初は、近代を代表する言論人、また小説家としてそれぞれに知られた徳富蘇峰（猪一郎）・蘆花（健次郎）兄弟のすぐ上の姉である。夫である湯浅治郎は群馬県会議長として廃娼運動を導き、国会開設に伴い衆議院議員となるが、新島襄の死後、危機的な状況に陥った同志社を社員（専任職員）となり支えた。また息子の湯浅八郎は戦前戦後の困難の多い時期に第10、12代同志社総長を勉め、初代国際基督教大学学長となるなどの活躍をした。叔母の矢島楯子は桜井女学校校主代理、女子学院初代院長、東京婦人矯風会初代会頭として存在感を示し、姪の久布白落実は矯風会の次世代を担い廃娼運動に邁進した。

このように初の近親者はキリスト教の影響を多く受けつつ近代日本の教育や文化に大きな足跡を残したことで知られるが、初自身も同志社女学校創設期を代表する生徒とされ<sup>3)</sup>、1886（明治19）年の東京婦人矯風会設立に中心で関わり、1890年の新島襄の死を経て、1891年に家族で京都に転居するま

での約5年間、創設期の矯風会で女性の地位向上を目指し、国会傍聴など女性の政治参加を求め、廃娼運動や子守学校設立、さらには新島襄の同志社大学設立運動への協力に関わるなど非凡な活躍をしている。特に1889年「一夫一婦の建白」運動を矯風会南部部長として中心で導き、元老院に著名人を含む多数の署名を添え請願書を提出した出来事は、日本の女性史、キリスト教史にとどまらず、近代史全体の中でもより注目されるべき出来事である。また初は私立最初の保育者養成機関である桜井女学校保母科（幼稚保育科）一期生であり、1887年自宅と同住所に設立された「榎坂幼稚園」で中心となり働くなど、幼児教育の分野でも先駆的であった。

キリスト教が明治以降の女子教育に大きな影響を与えてきたことは一般的にも知られたことである。本論は、初の「一夫一婦の建白」運動での活躍は、初が受けた教育ともかかわりが深いと考え研究を進める過程で生じた、「学力履歴」に関する疑問に端を発する。この疑問については続く章で詳しく述べる。

湯浅初に関しては、本人に直接帰する資料が今のところ限られていることもあり、いまだ研究の途上ではあるが、初と「一夫一婦の建白」に注目したものとしては、近年では小檜山ルイが「群馬発廃娼運動の一部ととらえることができる」との興味深い指摘をしている<sup>4)</sup>。また拙論「湯浅初と『一夫一婦の建白』-東京婦人矯風会設立以前に注目して」では建白運動の背景として初のご家庭環境や信仰歴について論じ、同志社において次第に信仰が養われたこと、洗礼を受けたのはその後の上京した後の1883年であることを明らかにした<sup>5)</sup>。さらに「湯浅初と『一夫一婦の建白』-『楓と桜』に注目して」では、初が建白運動時に執筆した「楓と桜」『女学雑誌』164号（1889年6月1日）に注目し、あわせて初が編集をした対嶽逸人こと人見一太郎論述の小冊子『倫理之基』（1889年4月25日出版）、それを初が要約したもので請願書に準じるものとして扱われた「倫理の基の要旨」『女学雑誌』161号（1889年5月11日）について検討し、建白運動の一つのきっかけが憲法発布であること、初は一夫多妻のもとにある女性たちの苦しみ身近に知るものであり、キリスト者としての自らの使命の問題として建白運動に積極的に取り組んだことを明らかにした<sup>6)</sup>。

初の生涯に関しては姪の久布白落実による伝記『湯浅初子』（以下『初子』）が最もまとまったものであり、これまで初の生涯に関する文献はこれによるところが多かった<sup>7)</sup>。『初子』には近親者にしか描きえない初の姿や、新婚時代の日記の一部、晩年の手紙の一部など、現時点では所在が不明の貴重な資料からの引用が含まれる一方で、特に今回注目する熊本洋学校から同志社時代に関しては不十分な点や明らかな誤解も見受けられる。そのため、本研究では『初子』を踏まえつつ、「学力履歴」に記された初の歩みを再検討するため熊本洋学校、同志社英学校において初と共に同様の経験をした従姉妹の海老名宮（夫海老名弾正、父横井小楠、兄横井時雄、母横井ツセ子〔初の母徳富久子の妹〕）の証言、弟の徳富蘇峰の証言や日記など関係者の資料も用いて、初の歩みを検討することとする。

なお本論は一女性に注目してのミクロな視点からの研究となる。より広い視点からの男女共学制の史的研究としては橋本紀子の『日本の男女共学制の史的研究』などの優れた先行研究がある<sup>8)</sup>。また、熊本洋学校及び熊本バンドについては同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究 ―日本プロテスタント主義の源流と展開』<sup>9)</sup>、同志社女学校に関しては宮澤正典『同志社女学校史の研究』<sup>10)</sup>などのまとまった先行研究があり、本稿も多くの恩恵を受けた。

## II. 「榎坂幼稚園設置願」における湯浅初の「学力履歴」の疑問点

湯浅初は1885（明治18）年に湯浅治郎と結婚した後、治郎の理解と協力を得て、1887年に治郎が設立者、初が唯一の保母となり、自宅と同じ「赤坂区榎坂町五番地」に開園した「榎坂幼稚園」で働いた。初に関する資料が限られる中で、当時の東京府に提出された「榎坂幼稚園設置願」は貴重なものであり、特に「保母等品行学力履歴及幼稚園設立者履歴」に記された初の「学力履歴」は初の歩みを知るうえで重要である。

「学力履歴」該当箇所の画像（図1）は知り得る限り初出であるが、榎坂幼稚園は私立の幼稚園として先駆的なものであることもあり、この箇所はす



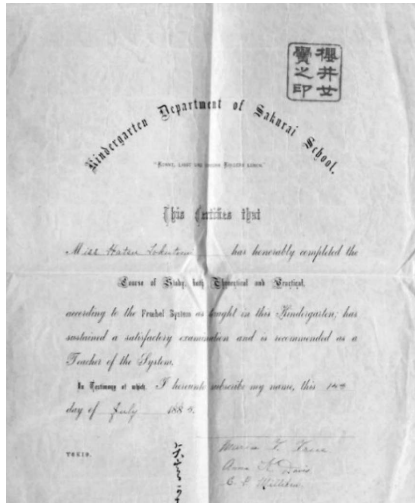


図 2

らず、「学力履歴」は熊本洋学校、慶應義塾幼年局、同志社英学校について多少知る者にとっては疑問の多いものである。なぜならばいずれの学校も男子校であるからである。

これまで十分検討はされてこなかったがこの「学力履歴」を文字通り受け止めるならば、まるで初はこれらの男子校で正式に学んだかのようなのである。しかしこれは決して経歴詐称などと短絡的に結論付けるべきことではなく、むしろそれなりの根拠があった上でこのような「学力履歴」としたのであり、この「学力履歴」は初の受けた教育の実際とそれに対する認識を色濃く反映したものではないかと捉え、続く章で詳細を検討していく。

なお初は「学力履歴」に記された以前には、生まれ故郷の水俣で寺子屋に通い初歩的な読み書きを学んだという<sup>13)</sup>。また、「学力履歴」のなかで桜井女学校保姆科の学びについては、女学校であり 1885 年 7 月 14 日付の「櫻井女学校保育科修了証書」(図 2) も残されているので、今回は検討の対象とはしない<sup>14)</sup>。

### Ⅲ. 熊本洋学校での学び

「学力履歴」によると、湯浅初は熊本洋学校で1872（明治5）年11月から1876年9月まで学んだ。つまり初は、熊本洋学校の2期生であり、「熊本バンド」の中心人物でもある海老名弾正らの同級生として熊本洋学校に入学し、4年間の正規課程をほぼ全うしたかのようである<sup>15)</sup>。

熊本洋学校は熊本県（白川県）が維新後の新たな時代の熊本を担う若者を育てるためにアメリカ人教師のL. L. ジェーンズ（Leroy Lansing Janes）を招き1871年9月1日に開校した4年制の男子校である。1873年のキリスト教の高札撤廃を経て、ジェーンズが希望者に自宅で聖書を教えるようになり、ついにはキリスト教を信じるようになった若者たちが1876年1月30日花岡山で「奉教趣意書」に署名をする事件（花岡山事件）が起きた。それが大きな騒動となったこともあり洋学校は1876年9月閉校となっている。それに伴い1876年秋以降キリスト教を受け入れた洋学校の生徒及び卒業生が1875年に開校したばかりの同志社英学校に前後して次々に入学したが、彼らはやがて「熊本バンド」と呼ばれ、日本のキリスト教界はもちろん日本社会でも注目される活躍を遂げていくことになる。「学力履歴」によるならば、初もまた「熊本バンド」の一人であるかのようにも見え、検討の必要がある<sup>16)</sup>。

#### (1) 在学期間

熊本洋学校における初の男女共学体験については比較的知られたことであり、『初子』はもちろん、海老名弾正・宮夫妻、L. L. ジェーンズなど複数の関係者が印象的にそのことについて証言している。しかしながら、それらの証言も初が4年間もの間、正式に男子校である熊本洋学校で学んだことを裏付けるものではない。「学力履歴」は何を根拠に熊本洋学校での在学期間を1872年から1876年としたのだろうか。

海老名宮は「私と従妹の二人は初めはゼーンズ夫人に英語をおそはつてをりました」とし<sup>17)</sup>、徳富蘇峰も初が「ゼンズ夫人の門人」だったとする<sup>18)</sup>。

ジェーンズの妻ハリエットは牧師や宣教師を輩出しているスカッター家の出身であった。

では初がジェーンズ邸に出入りしハリエットに英語を習いはじめたのはいつ頃からだろうか。海老名宮は、ジェーンズ家の子どもが二人だった時から「私の家とは懇意」「よく遊びに参りました」として、クリスマスにも招待されたことを明らかにしている<sup>19)</sup>。ジェーンズ家の子どもが二人だった期間は、ジェーンズ夫妻が娘ファニーとヘンリーを伴い 1871 年 8 月 15 日に熊本に到着して以降、1873 年 9 月 1 日にロイスが誕生するまでの間であるので<sup>20)</sup>、宮が初めてジェーンズ邸でクリスマスツリーを目にしプレゼントをもらったというクリスマスの思い出は 1871 年 12 月、または 1872 年 12 月の事ということになる。

初が宮と共にジェーンズ家のクリスマスに同行したかは不明とはいえ、可能性はある。蘇峰によると 1870 年に徳富家が水俣から熊本に越して以降「予の姉は横井家に在」ったという。つまり初は横井家に寄寓しておりそこで「英語を学ぶことゝなった」、「予の姉はゼンズ夫人に就いて學んだ。その仲間は、横井家の女みや子、現海老名弾正夫人である」という状況だった<sup>21)</sup>。宮も、初について「此従妹は幼少の頃から多くは私の家に来て居られて私の姉の様」と記している。宮はジェーンズ家が岩戸で夏の休暇を過ごした際に初が共に招待されたことも明らかにしている<sup>22)</sup>。ジェーンズ家は 5 年間の熊本滞在中、夏の休暇で 2 回岩戸を訪れているが、それは石井容子によるならば 1872 年と 1873 年のことである<sup>23)</sup>。

以上のことより、初は「学力履歴」の熊本洋学校入学の時期、1872 年 11 月には宮同様にジェーンズ邸に出入りしていた可能性が高い。

次に初が男子の洋学校で学ぶことになる経緯と時期について検討する。『初子』は熊本洋学校で兄弟たちが学ぶようになると「親等も種々工夫して、ゼンスの妻君に頼んで娘等の好学の精神を満足させて貰う事になった」としている<sup>24)</sup>。宮の兄横井時雄は 1871 年秋に一期生として熊本洋学校に入学した。1872 年秋には初の弟蘇峰が二期生として熊本洋学校に入学している。もっとも蘇峰は満 9 歳という年少だったこともあり、まもなく退学し 1875 年秋に再入学した。初と宮の母である徳富久子、横井ツセ子の姉妹は教育熱

心であり、初は満年齢で蘇峰の3歳上、宮に至っては数か月違いでほぼ蘇峰と同年齢であることを考えると、1872年の蘇峰の最初の入学が、初と宮の教育についても検討するきっかけになったとも考えられる。

一方 L. L. ジェーンズの回想『ジェインズ 追憶の記』（以下『追憶』）によれば、「熊本教育事業3年目に」洋学校生徒の「保護者の母親2、3名のほかに、地域の母親達」からの女子受講希望者のための協力依頼があり、最終的には「毎日ではなく、週2、3時間の授業を行う」こととなり、ジェーンズ邸の一室に少女たちの為の畳、机を用意し、新たな乳母一名を雇ったが、受講希望の少女十数名は次第に減り、ついに2名だけ、つまり初と宮だけになり計画は本格的に開始される前に中止された<sup>25)</sup>。その後「(数え)4年目を迎えようとする頃」(括弧訳者)、横井時雄ら2名の洋学校生が姉妹のことで来て「彼女たちを洋学校の新入生クラスに入れてもらえませんか」と許可を願い、「学校は4年目に入り二人の少女を迎えた」という。初と宮は洋学校で学び続け、2年後に洋学校は閉校した<sup>26)</sup>。

『追憶』は、ジェーンズが晩年にまとめたことも関係があるだろうが、他資料と比較検討すると年代に疑問が残る点がある<sup>27)</sup>。また宮はジェーンズ夫人ハリエットのもとを離れ洋学校で学ぶまでの経緯を、ハリエットが「出産の為や何かで教へられなくなりましたので、男子の學校に通うことになりました」としている。しかし、『追憶』執筆時にはすでにハリエットとの不幸な離婚を経験していたジェーンズは、不自然なほどにハリエットが初と宮を当初教えたことには触れず、むしろハリエットが女子教育に非協力的だった面を強調する<sup>28)</sup>。しかしこのジェーンズの回想に従うと、初と宮が洋学校で学んだのは1874年の秋の新学期から1876年9月の閉校までの2年間である。

初の熊本洋学校在学期間に関して、特にジェーンズ邸においてハリエットに英語を学び始めた詳細な時期を裏付けることは今のところ困難だが、いずれにしても「学力履歴」で初の熊本洋学校での学びを1872年11月からとしているのは、正規の熊本洋学校ではなくジェーンズ邸においてハリエットの下で学んだ期間を含めていることは確かである。また熊本洋学校でのジェーンズの指導はよく知られているように「座席は学業成績の順」などいわゆる



スパルタ式の厳しいものであった<sup>29)</sup>。一方それに先立つジェーンズ邸における初と宮の学びは、ジェーンズ夫妻の仲はいつも良好とは言えなかったようだが、クリスマスや夏の休暇などジェーンズ一家の暮らしぶりを間近で見聞し、「クリスチャンホーム」を体験する家族的な交わりの中にあったといえる。

## (2) 男女共学の実際

ジェーンズ邸及び熊本洋学校での学びは、初と宮の保護者、とくに母たちの教育熱心と、兄たちの協力、本人たちの向学心などに加え、なによりもジェーンズの深い理解があって実現したことであることは間違いない。しかしながら、『追憶』は男女共学のよき理解者としてのジェーンズ自身が饒舌に語られ、誇張されていると思われる点がみうけられる。

例えば『追憶』では教室内で初と宮は男子と同じベンチに腰掛け、それを拒む男子生徒が床に座り込んだことになっているが<sup>30)</sup>、宮によると「通學丈はゆるされましたが黒板に向ふ時の外教室内に入ることは出来ませんでした。いつも縁側にベンチを置いて、夏は日光にてらされ、冬は寒風に吹かれながら、他の男學生と一緒に授業しました」という状況で、実際にはかなり制限された聴講扱いだったことが分かる<sup>31)</sup>。

また海老名弾正が男子生徒代表でジェーンズに男女共学の不満を伝えに来た際のことについても、『追憶』ではジェーンズは奴隷制の事などを引き合いに出し海老名弾正とだいぶ長いやりとりをして説得したことになる<sup>32)</sup>。後に海老名の妻となった宮によるとジェーンズは「君のお母さんは男か女か」と問い、「此一言でその青年は降伏させて了りました」とのことであるが、いずれにしてもジェーンズの理解ある姿勢が初と宮が洋学校で、かなり制限はある状況ではあったが、男子同様の学びの機会を与え、守ったのである。

## IV. 慶應義塾幼年局での学び

熊本洋学校閉校後、「学力履歴」によるならば、初は1877（明治10）年

11月から1878年3月まで、慶應義塾幼年局（幼稚舎）で学んだ。『初子』によれば17歳の初が「いづれ直接福澤翁に依頼したことであろう」と勇ましい姿で記されているが、これは伝記を書いた久布白の想像であり、事実とは異なると考えるのが妥当である<sup>33)</sup>。当時すでに著名であった福澤に、初が性別や年齢の垣根を越えていきなり直談判するというのはかなり不自然なことであり、後に初が矯風会のことと福澤に協力を願う際も、津田仙の紹介を得てたずねているからである<sup>34)</sup>。むしろ初が慶應義塾で学び得たのは叔父の江口高廉（父一敬の弟）が養子となっていた江口家の協力であったと考えるのが自然である。

江口高廉の4人の子はいずれも福沢門下で愛顧を受けており、その関係があるので蘇峰も「予は当然慶應義塾に入るべきであった」と語っている程である<sup>35)</sup>。実際には、東京に出た蘇峰は東京外国語学校などに一時在学するが満足できず、1876年秋に同志社英学校に入学した。

さて、従来明治期の慶應義塾は男子校であり、女子教育を行う事は無かったといわれてきた。しかし「学力履歴」は、慶應義塾幼年局で学んだことになっているので、その実際についても簡単に触れる。

## (1) 在学期間

慶應義塾幼稚舎の歴史は1874（明治7）年まで遡る。慶應義塾の「勤惰表」（成績簿）に「幼年局」との名称が用いられた最も古い時期は1877年1月から4月のものである<sup>36)</sup>。慶應義塾の女子教育に関しては西澤紀子の研究に詳しいが、慶應義塾の正式な記録に女子の在籍が記される最も古い例は1879年9月から1881年7月までの「勤惰表」にある福沢阿三（諭吉長女）らであり、それ以降女子らしい名前は見受けられないという<sup>37)</sup>。一方、1878年の「受教料請取」に中沢米の名前があり、「勤惰表」には記録が残ってなくても、1878年にはすでに女子生徒が在籍していたことが明らかにされている<sup>38)</sup>。

慶應義塾における女子教育に関して、11月19日付幼稚舎初代舎長の和田義郎宛福澤諭吉書簡には「女子英語学も御始相成」とあり、この書簡は女子生徒の在籍を示す記録などにより従来1879年頃のものとして推定されてき

た<sup>39)</sup>。しかし「学力履歴」には「明治十年十一月」つまり1877年11月に初が「東京慶應義塾ニ入学 同十一年三月迄幼年局ニ於テ英学ヲ修ム」とあり、書簡の11月19日付書簡で女子英語学が始まったとの内容に一致する。以上から判断すると、断定はできないまでも初がこの時期慶應義塾幼年局で学んだことはあり得ることである。「学力履歴」は、慶應義塾の女子教育を検討する際の資料としてはこれまで用いられてこなかったが、前述の中沢米同様に正式な記録には記載されていない女子生徒である初について、あるいは女子への英学教授を検討する際の重要な資料であるといえる。

## (2) 男女共学の実際

それでは慶應義塾幼年局での男女共学はどのようなものだったのだろうか。西澤は女子教育が始まったこの頃の幼年局では男女で教室が異なり、女性の履修科目は男性と内容が異なりより初歩的な内容であったようで科目数も少なく、「男女共学の実施とはいえないのでは」と結論付けている<sup>40)</sup>。そもそも幼年局は慶應義塾で学ぶ前の教育を担っていることもある。1877(明治10)年11月時点で初は満17歳であるが、福沢の長女阿三は初の8歳年下であり、前述の「勤惰表」に名がみられる1879年9月時点でも満11歳である。初の幼年局での学びは半年にも満たないが、教室の外からの聴講とは言えずに中等教育程度を担う熊本洋学校で男子と同じ内容を学んだ初にとっては、慶應義塾幼年局の学びは満足 of いくものではなかった可能性がある。とはいえ、現時点では1877年頃の幼年局の女子教育に関する資料は十分見いだされていない状況であり、これ以上のことは今後の研究の課題としていきたい。

## V. 同志社英学校での学び

「学力履歴」によれば、湯浅初は同志社英学校に1878(明治11)年9月から1879年10月に在学している。すでに1876年10月24日には女性宣教師A. J. スタークウェザーが中心となり女子塾が開設され、翌1877年には京都府への開業届を提出し「同志社分校女紅場」、同年改称され「同志社女学校」

となっていた。初は「男女共学体験」をした同志社女学校創設期を代表する生徒とされ、例えば同志社女子大学が広報の為に配布している冊子『The roots : 同志社女子大学 人物編』では、初は創立者新島襄につづき5番目、生徒としては最初に紹介されるなど、同志社英学校に入学したとする「学力履歴」との齟齬が見られる<sup>41)</sup>。

## (1) 在学期間

初は同志社女学校創設期を代表する生徒とされながら、正式に卒業していないこともあり在学期間さえはつきりしなかった。そのため、「学力履歴」に示された1878(明治11)年9月から1879年10月の在学期間を手掛かりにその詳細を検討する。

まず入洛の時期である。初は1878年9月の入学以前、8月の夏休み中には京都に来ており、新島襄宅にしばらく寄宿した。初の回想によると彼女が東京から京都にやってきた際に、「既に其時は私の第二人が先生の家に厄介になって居」り、初も「懐かしみのある父母の懐ろに帰ってやれ安心と云う心地」で「学校が始まる迄置いて頂いて居た」という<sup>42)</sup>。

弟の徳富蘇峰は1876年秋に同志社英学校に入学し、その後1878年、熊本への帰省時に弟蘆花を伴って京都に戻った。蘇峰の日記によると、8月4日から29日まで、蘆花、大西祝、家永豊吉らと岸和田に滞在しているが、8月14日「晩方西京姉君より手紙来る」とあり、初がこの時にはすでに京都にいたことがわかる。さらに8月30日に京都に戻った蘇峰は「遂ニ新島氏ニ逢遇し姉君ニ遭ヒ、同志社ニ至る」とある<sup>43)</sup>。

次に初の同志社入学の時期と入学先だが、「学力履歴」では1878年9月同志社英学校入学となっている。しかし前述の初の回想では、初の経験した同志社女学校での日々が生き生きと語られている。加えて初の同志社在学当時、女学校の教育を中心で担った宣教師スタークウェザーの1879年2月24日付の書簡(チャイルド宛)の中には、女学校の生徒としての初に触れ、「お初さん、19歳です。昨年9月に入学したばかりです」とする。これらは初が実際には1878年9月に同志社英学校ではなく同志社女学校に入学したことを裏付ける<sup>44)</sup>。

では、初の同志社女学校在学はいつまでであっただろうか。「学力履歴」によるならば1878年10月までであるが、確認できるところでは、初は「今の横井の奥様や山本みね子さまも一緒に、杉山の奥様、田代つぎ様、加賀の人で河辺様達は未だ十一位の子供であった」と回想している<sup>45)</sup>。この「杉山の奥様」とは杉山重義の妻・杉山（広瀬）恒のことだが、なるほど恒も「寄宿舎には湯浅治郎氏夫人や海老名夫人が居られまして」と回想していることが参考になる<sup>46)</sup>。後に恒が働いた群馬の清心幼稚園の設置願に示された履歴によると恒は「同十二年九月十日西京私立同志社女学校ニ入学ス」とあり、初は少なくとも1878年9月から1879年9月まで確かに同志社女学校に在籍し寮内で生活をしていたといえる<sup>47)</sup>。

初が1879年10月に同志社女学校を退学したことをはっきり裏付ける資料は今のところ見出せていないが、蘇峰1879年9月に記した日記には「今度帰校以来ハ余程キリツメタル儉約ヲシツレトモ、灯火ハ勿論郵便印紙サヘコマル位甚シ、困窮想像ス可シ」とあり<sup>48)</sup>、蘇峰の困窮は仕送りをしている実家の状況と無関係ではないだろう。蘇峰は後にこの時代を指し、再度の「母の受難時代」と記しており<sup>49)</sup>、こうした家庭の事情が初の退学に影響していると考えられる。いずれにしても弟二人は勉学を継続する一方で、後述の通り大変な意気込みで学んでいた初は同志社女学校を一年ほどで退学することになったのである。

## (2) 男女共学の実際

ここでは、スタークウェザーが初を同志社女学校の生徒としており、初自身も女学校での日々を回想しているにも関わらず、なぜ「学力履歴」では同志社英学校に在学したように記されているのかを検討したい。

初は、熊本洋学校などで学び勉強が進んでいたこともあり、従姉妹の海老名宮、山本覚馬の娘で新島八重の姪である山本峰らと同様に許され同志社英学校に通った。このことに関して同志社英学校に同時期に在籍していた蘇峰は「当時の女学校は課程が低かつた為に、予の姉等は男子と共學といふことにて、同志社に學んだ。學業の成績は非常に秀いでたと云えなかつたが、男子に比して相當のものであった様だ。予の姉は予とは寧ろ反對で數學が好

きであつた」と証言する<sup>50)</sup>。同志社女学校の教員が増えカリキュラムが充実していくのは、1879 (明治 12) 年 6 月に同志社英学校を卒業した熊本バンドの宮川経輝、加藤勇次郎が教師として着任した 1879 年秋以降のことであり、初はその恩恵をあまり受けていない。

同志社英学校最初の成績簿といわれる (Do shi sha Gakko. Register for Recitation, Regulation of Attendance, and Average Standing in Classes, Kiyoto, 1877.) には、1877 年秋学期以降「Tokutomi」の名前が見受けられ、1878 年秋学期になり「Tokutomi」に加え「Tokutomi K」「Tokutomi H」の名前が現れる。初、蘇峰、蘆花の入学時期から考えても、「Tokutomi」が蘇峰、「Tokutomi K」が蘆花 (健次郎)、「Tokutomi H」が初を表すと考えられる。「Tokutomi H」は 1878 年秋学期に「Algebra」「Harmony」「Physiology」「Chinese」、1879 年冬学期に「General History」「Gospel」「Jap. Decl.」、1879 年春学期に「History」「Astronomy」「Rhetoric」を履修している<sup>51)</sup>。

履修の時期や、科目が完全に重なるわけではないが、成績簿には同時期に宮をあらわす「Ise Miya」、山本峰を表すと思われる「Yamamoto」の名前が見受けられ、初、宮、峰 3 名の女性がこのころ男子の英学校で学んでいたことに関連する重要な資料である。この成績簿は、男子生徒、女子生徒区別なくアルファベット順に記されている。熊本英学校では教室の外から聴講していたことに比べると、同志社英学校では男子生徒同様の扱いをうけており、これらの科目を正式な履修をしたといえる。つまり初は同志社女学校の生徒ではあったが、「学力履歴」に記すべき「学力」については英学校の授業により習得していたことがわかる。

### (3) 学びへの意気込み

初は女学校時代を振り返り「明治維新の後を受けた当時の女学生私共の意気は当たるべからざるものであった」「男だって女だって人間の道理は同じだ、少しも男に身を引く事はないと云ふ元気であったから、同志社女学校の生徒は男学校の人達の頭の上を歩るいて居ると云ふ評判が、京都の町に立ったさうである」と、他の女学校在籍者と比べても一段と学ぶことへの強い意気込みが現れた言葉を残している<sup>52)</sup>。これは初が女学校内のみにとどまった

のではなく、女学校において寮生活しながら、授業に関しては英学校において男子生徒と共に学んだ数少ない女性であることが関係すると考えられる。前述の成績簿によると1879（明治12）年冬学期は「Tokutomi H」のみで「Ise Miya」や「Yamamoto」の名前がない。宮がこの時期病気となり帰省していた事実とも重なり、初は英学校の男性の中、女性一人で学んだ日さえあったかもしれないことを想像させる。

このことに関して海老名宮は初と同時期に英学校で授業を受けていた同志社女学校時代を振り返り、「私の生活は全部女学校で造られたものではありませんから、女学校について昔を語ることは私は適當ではないかもしれませんが」「男学校に通いましたので女学校の授業等については詳しく申上ることは出来ません」としているのが参考になる<sup>53)</sup>。

女子教育への理解が乏しかった時代に在って、「熊本バンド」の様な才気にあふれ後に日本社会で目立った活躍をするような男性とともに、同じ内容の学びをしたということは初にとってその後の自身を支える誇りともなつたと考えられる。息子の八郎は初について「ウェスター辞書を風呂敷包みにして、背中に背負って同志社に通ったそうです。プライドはウェスターを持っていることでね」と述べており<sup>54)</sup>、はつ自身も「同志社女学校の創立と云ふ事は、飢ゑ乾いて居た者にパンと水を与へられた様に私共を悦ばしたのである」としている<sup>55)</sup>。

こうした状況を踏まえると、初は自身が同志社時代女学校の生徒だったことを承知していないわけではない。それにもかかわらず「学力履歴」を同志社英学校としているのは、実際に英学校で男性同様に学んだことにより初のこの時代の「学力」が養われたという事実だけでなく、それに関連する初の誇りが反映されているとみることもできる。

## VI. おわりに

以上、「学力履歴」を手掛かりに、初の受けた教育について検討してきた。男子校であるはずの熊本洋学校、慶應義塾幼年局、同志社英学校で学んだとの履歴は一見疑問の多いものだが、詳細な年月に関しては裏付けができな

った所もあるとはいえ、この履歴は信頼に足るものであると考えられる。しかし同時に、この「学力履歴」は、初の受けた教育の実際を誤解なく理解するためには、注意や説明を要するものであることは明らかである。

特に本研究を通して「学力履歴」における熊本洋学校での1872年11月から1876年9月の在学期間には、初がジェーンズ邸でジェーンズ夫人ハリエットより英学を学んだ期間が含まれることを確認した。また「学力履歴」によると同志社英学校での1878年9月から1879年10月の在学期間は、寮生活をした同志社女学校ではなく、「学力」に直結する授業を男子学生と共に正式に履修した同志社英学校への在学との理解で記されていることがわかる。なお、初は1878年8月には入学に備え入洛しており、同志社女学校への入学は確かに1878年9月入学であること、少なくとも1879年9月までは女学校生徒として確かに寮生活を送っていたことも今回確認した。

初は女性のごく初歩的な読み書き以上の教育を受けることが難しかった時代にあって、「熊本バンド」の男性らが受ける中等程度以上の英学をアメリカ人教師らから共に受けた。熊本洋学校では男子生徒の反発を受けながら廊下での制限の多い聴講のような形であり、同志社英学校では成績簿に名前や成績が書き込まれるというより平等な立場で正式に履修をした。一方で初の慶應義塾での学びについては今後のさらなる研究の課題としたいが、西澤の指摘によればこの頃の幼年局の女子教育は男子学生と別教室、別内容の学びであり、男女共学とは言えない面があるという。

いずれにしても初はこの時代にあって、男性と比べても全く遜色のない大変高学歴な女性であったといえ、「学力履歴」は「男性同様の学びをした」という事実と誇りが反映されているともいえる。

初が従姉妹の宮と共にこうした貴重な学びの機会を得たのは、本人たちの学ぶ意欲や母親たちをはじめとする家族の理解に加え、熊本洋学校のジェーンズ、同志社英学校の新島襄、同志社女学校のスタークウェザーらが、それぞれのキリスト教信仰に根差した女性教育への理解から初らに男性同様の学びを許したという事実があるだろう。

キリスト教が明治期以降の日本の女子教育に大きな影響を与えたとはよくいわれることであり、キリスト教を背景とする女学校の開校は、日本の女性



たちに学ぶ機会を広げた。小檜山などが指摘するように、女学校において宣教師たちの目指したキリスト教女子教育は、学業だけの事ではなく寮生活も含めたより広いもので、いわばキリスト教的な疑似「ホーム」を経験することにより、クリスチャン同士の結婚による新たな「ホーム」の担い手の養成を目指した面がある<sup>56)</sup>。初は、熊本時代には「ホーム」をハリエットより学んだ期間を中心にジェーンズ家との交流により体験し、同志社においては入学前の新島家滞在や、女学校での寮生活で体験している。一方、「学力」につながる授業に関しては、熊本ではハリエットが指導を続けられなくなったことや、草創期の同志社女学校ではまだ教員やカリキュラムが十分整っていなかったことなどから、それぞれ熊本洋学校や同志社英学校で男子生徒と共に学ぶ男女共学体験をすることになった。つまり初は、そして従姉妹の宮もだが、キリスト教女学校の「ホーム」体験と授業の双方を女学校内で行う典型的なキリスト教女子教育の形に当てはまらない、かなり変則的なキリスト教女子教育をうけたといえる。

なお初の男女共学体験に関して、例えば熊本洋学校での学びは「日本初の男女共学の実現であったこと違いない」と評価されることもある<sup>57)</sup>。「日本初」とは少し言い過ぎであろう。実際には明治初期のこの時期、山川菊栄『女二代の記』に記された母青山千世の例や、女性初の医師となった荻野吟子の例など、他にも男女共学の例はある<sup>58)</sup>。初らの男女共学体験もより広い視点をもってキリスト教女子教育や、男女共学の取り組みの中でその意味をさらに検討する必要もあるが、これらについても今後の研究の課題としたい。

## 注

- 1) 湯浅初は、戸籍上は「はつ」であり、「初子」の表記も広く見られるが、ここでは戸籍により忠実に、かつ論文という性質上、ひらがな表記による文意の混乱を避けるため「初」で統一する。また、独身時代のことを論じるという点では、徳富初と表記すべきであるが、湯浅初としての方が一般的により認知されていることから湯浅姓を用いた。
- 2) 東京都公文書館所蔵。資料の概要情報は次の通り。【公開件名】(原譚欠)(湯浅治郎より榎坂幼稚園設置願)【収録先の名称】普通第2種 願伺届録・各種学

- 校・9冊ノ内4〈学務課〉【収録先の請求番号】616.C 7.16【綴込番号】49【資料種別】公文書\_件名\_府市【作成主務課1】学務課【文書年度(和暦)】明治20年~明治20年【文書年度(西暦)】1887年~1887年【起案年月日(和暦)】明治20年05月11日【起案年月日(西暦)】1887年05月11日【記述レベル】item【収録先簿冊の資料ID】000117235【公開区分】条件付利用
- 3) 『同志社女子大学 125年』編集委員会編『同志社女子大学 125年』(同志社女子大学、2000年)、p.64。
  - 4) 小檜山ルイ「佐々城豊寿とその時代(7)」『キリスト教文化』8号(2016年)、p.159。
  - 5) 山下智子「湯浅初と「一夫一婦の建白」-東京婦人矯風会設立以前に注目して-」『キリスト教史学』74号(2020年)。
  - 6) 山下智子「湯浅初と「一夫一婦の建白」-「楓と桜」に注目して-」『キリスト教史学』76号(2022年)。
  - 7) 久布白落実「湯浅初子」(湯浅太助(非売品)、1936年)。例えば『初子』によるところが大きいものに、半田喜作編著『湯浅治郎と妻初』(『湯浅治郎と妻初』刊行会、1994年)。
  - 8) 橋本紀子『男女共学制の史的研究』(大月書店、1992年)。
  - 9) 同志社大学人文科学研究so編『熊本バンド研究 日本プロテスタンティズムの源流と展開(新装版)』(同志社大学人文科学研究so、1997年)。みすず書房より1965年に出版されたものの新装版。
  - 10) 宮澤正典『同志社女学校史の研究』(思文閣出版、2011年)。
  - 11) 榎坂幼稚園と初に触れたものに、前村晃「豊田英雄と創設期の幼稚園教育に関する研究:補遺1-保育者・古市静子の立ち位置」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』16巻2号(2012年)、pp.25-56。
  - 12) 東京都編『東京の幼稚園』(都史紀要14)(東京都、1966年)、pp.93-94。
  - 13) 久布白『初子』、p.22。
  - 14) 「桜井女学校保育科修了証書」『湯浅与三関係資料』同志社大学人文科学研究so蔵。この卒業証書によると、初は1885年7月14日に一期生としてフレーベル方式による「理論」と「実施」の2コースを修了している。矢島かじ、Maria T. True、Anna K. Davis、E. P. Milliken、4名の署名が見受けられる。
  - 15) 熊本洋学校では、1期生、2期生を「一級生」、「二級生」とした。
  - 16) 一例としてジェーンズ研究としてまとめたものに、石井容子『熊本洋学校教師 Capt. L. L. Janes 研究-足跡と功績-』(佑啓社、2013年)。
  - 17) 『新女界』大正3年8月1日。

- 18) 徳富猪一郎『蘇峰自伝（復刻版）』（同志社社史資料室、1995年）、p.64。
- 19) 『新女界』大正3年1月1日。
- 20) 石井『Janes 研究』、p.122。
- 21) 久布白『初子』、付録 p.3。
- 22) 『新女界』大正7年7月1日。
- 23) 石井『Janes 研究』、p.123。
- 24) 久布白『初子』、pp.31, 34。
- 25) 石井容子『ジェインズ追憶の記』（佑啓堂、2019年）、pp.132, 135。石井著となっているが実際には石井訳のジェーンズのこの回想に関しては、抄訳の上解説を加えた以下の書籍もある。ジェーンズ, L. L. (田中啓介訳)『熊本回想（改訂版）』（熊本日日新聞社、1991年）。
- 26) 石井『追憶』、p.138。
- 27) 『追憶』の訳者でありジェーンズ研究者の石井氏も翻訳に苦慮され、場合によっては年代に「(数え)」と挿入されたことを直接ご本人によりご教示頂いた。
- 28) 『新女界』大正5年8月1日。
- 29) 石井『Janes 研究』、p.58。
- 30) 石井『追憶』、p.139。
- 31) 『新女界』大正5年8月1日。
- 32) 石井『追憶』、pp.141-144。
- 33) 久布白『初子』、p.50。
- 34) 湯浅八郎『若者に幻を』（国際基督教大学同窓会、1981年）、pp.80-81
- 35) 徳富猪一郎『自伝』、p.74。
- 36) 慶應義塾幼稚舎編『慶應義塾幼稚舎史日録』（慶應義塾幼稚舎、1965年）、p.2。
- 37) 西澤直子「慶應義塾における女子教育」『近代日本研究』24号（2007年）、pp.188-189。
- 38) 同上、pp.190-191。
- 39) 慶應義塾『福沢論吉書簡集』（岩波書店、2001年）、p.59。
- 40) 西澤「女子教育」、p.193。
- 41) 同志社女子大学広報課編『The roots：同志社女子大学 人物編』（同志社女子大学広報課、2014年）、pp.11-12。
- 42) 同志社社史資料室編『創設期の同志社：卒業生たちの回想録』（同志社社史資料室、1986年）、p.330。この資料は1918年に刊行された松浦政泰『同志社ロマンス』のために収集された聞き書き資料をまとめたものであり、実際の学校生活より40年もの歳月がたっていることは踏まえる必要がある。

- 43) 花立三郎他編『同志社大江義塾徳富蘇峰資料集』(三一書房、1978年)、pp.37-38。
- 44) 日比恵子監訳「アメリカン・ボード宣教師文書：同志社女学校女性宣教師を中心として：スタークウェザー書簡訳および註(4)」『Asphodel』46号(2011年)、p.187。
- 45) 同志社社史資料室編『回想録』、p.325。
- 46) 『新女界』大正5年8月1日。
- 47) 群馬県史編さん委員会編『群馬県史資料編22近現代6』(群馬県、1983年)、p.218。
- 48) 花立他編『資料集』、p.84。
- 49) 徳富猪一郎『わが母』(伝記叢書197)(大空社、1995年)、pp.67-68。
- 50) 久布白『初子』、付録 p.7。
- 51) 同志社社史資料センター蔵。なおこの成績簿の宮(Ise Miya)のページ画像は『同志社女子大学125年』に掲載されているが、現在ではプライバシー保護等の観点から現物を確認することは許可されず、社史資料センター小枝弘和氏の調査協力で、成績を除く、名前、年代、取得した科目を確認した。
- 52) 同志社社史資料室編『回想録』、pp.327-328。
- 53) 同志社社史資料室編『回想録』、p.422。
- 54) 同志社大学アメリカ研究所編『あるリベラリストの回想―湯浅八郎の日本とアメリカ』(日本YMCA同盟出版部、1977年)、p.82。初所有のウェブスターに関しては、桜井女学校幼稚保育科一期生であった1884年に神田神保町で求めたものが現存しているが、関係者より熊本のジェーンズ邸に寄贈され、2006年の熊本地震で建物と共に被災したため、激しい損傷を受けた状況であることを2020年2月24日に現地を確認した。
- 55) 同志社社史資料室編『回想録』、p.330。
- 56) 女性宣教師による女子教育について論じたものとして、キリスト教史学会編『近代日本のキリスト教と女子教育』(教文館、2016年)。
- 57) ジェーンズ、L. L. (田中啓介訳)『回想』、p.154。
- 58) 山川菊栄『おんな二代の記』(岩波文庫)(岩波書店、2014年)。